きのうのこと、これからのこと

鏡雅

今日は仕事もやることもやりたいことも落ち着いた週末。明日明後日はマーケットが人で溢れかえる日だ。
冒険者と最古の魔導士だった男は今は一つ屋根の下で暮らしている。
『これから眠るという時に、またこちらにきてもらっても困る』
と、エメトセルクは冒険者の最期を見届けるまでは留まると意思表示をして、名目上の偽名を使ってはいるがバルデシオン委員会の活動に協力している。
かのアラグ帝国の一応の関係者であるとの事で調査や暗号解読など活躍しているようで、ギクシャクしつつもグ・ラハ・ティアたちと仲良くやっているようだ。
肉体は魔導城の研究室に奇跡的に残っていた複製された肉体を媒介として受肉して、誰にでも視認できる状態でヒトの身ならなんでも出来るらしい。見た目はソルのままだと支障が出ると言って、思い出した自分の姿に弄って、外見は古代の姿、性格はあの皮肉屋と妙にちぐはぐで未だに慣れない。
タバコに燐寸で火をつけて、少し振って火を消すと用済みの棒は灰皿に置かれて、ゆっくりと胸を膨らませて、口から煙を燻らせている。
ヒトを演じてきた時の抜けきらない名残だ、と喫煙者なら誰でもする動作はどこか洗練されている。

「明日はどこかへ行くのか？」
「いや、のんびり過ごそうかなって。依頼も立て込んでないし、リーヴも急ぎはないし」
タバコをふかして、
「なら、身体は空いているという事だな？」
いつもは気だるげに目尻を上げているというのに今は目を眇めて、急接近したかと思ったら、頬に手を添えられて動けなくなる。
キスをする時はいつもタバコのえぐみのある苦い味が薄らと舌の上を撫でた。
ファーストキスは甘酸っぱいとか甘いとか聞くけれど、実際体験したのは大人の味だった。
タバコの味は好きじゃないと伝えてもいいものなのだろうか、と毎度思っては、一瞬で忘れて、またキスをされた時に思い出してを繰り返している。
「……苦い」
「味覚は子供だな」
「一生、慣れないよ」
そういうとエメトセルクはニヤリと笑って極悪人面からは想像できない触れるだけの口付けをされると、そのまま肩を優しく掴まれて布張りのソファにもたれ掛かる。
「慣れるんだよ。これからも、するんだからな」
唇をぺろ、と舐めてから形のいい唇が押されれば、あとは為されるがままだ。

一緒に暮らすと言うことは話し合わずともそうしようと意見が一致して、丁度買い手がなかなかつかないと聞いていた土地を交渉して手に入れ、小さな家を買った。空っぽの部屋は椅子にテーブル、ベッドと更に水周りと物が増えて生活が快適にできる空間になった。二人にとって過ごしやすく家にどちらかがいれば、どちらかが家にいるから自然と帰る家となって、お互いの予定が分かるようになると一緒に冒険へ行ったり、街へ遊びに行ったり、家に篭って仕事を手伝ったり、暇を謳歌したりして時間を過ごしている内に自然と唇を重ねて、そのまま体を重ね合わせるのも自然のことだった。冒険者もハーデスも心地よい時間の使い方に満足して、相手を思う気持ちが心地よかったのだ。だから、何も明言はしていないけれど枕を共にする関係になった今も告白はしていない。

「もっと、広いところがいい」

「味見程度だったんだが、そんなに欲しいのか？」

「狭い場所で愛を尽くすのも悪くは無いけど、もっと柔らかいところでしてくれたらいっぱいできると思うなあ」

「欲しいのか？」

耳元で色気たっぷりの甘く囁く声は脳と腹の奥を震わせるには十分で、顔を逸らそうと首を横に向けても、答えを催促する為に鳴らす喉でさえ、それ以上囁かれてしまったらそれだけで気持ち良くなってしまうから、なんとか目を開けるとエメトセルクは目を細めて唇を舌で湿らせていた。

「……欲しい、です」

「では、ここでは慣らしだけしよう」

言うなり噛みつかれるように口付けを与えられる。温かく柔い唇は何度も食まれ、大きな節くれた手は無遠慮に胸の上を滑って、服の中に簡単に潜って柔らかい部分を鷲掴んでは揉みしだいて、ぷくりと膨れて硬くなっていく乳首を指先で摘んで転がしてを繰り返す。

「んっ、んんっ」

「気持ちいいか？」

「きもちいい、あっ、やだ」

「いやなのか？ここは、食べられたがっているぞ？」

服の下で蠢いていた手はとうとう、服をたくし上げて胸の中心を摘むとエメトセルクの頭が降りていく。硬く実ったそこをじっと見つめて、断りもなく口に咥えられるとじゅるりと音を立てて吸われて、体の奥が男の味を占めてしまった最奥が潤っていくのを感じる。

「ぁっ、ぁ……ひぅ、ん、あっ」

「このまま入れてしまいたいなッ」

「味見って言ってたじゃんかあ……！」

「いらないのか？ん？」

胸を揉むのに疲れた手が今度は下半身に降りて、自然と開いている脚の間に止まってすりすりと撫でてくる。避けているであろう蜜芽をたまにかすっては腰がびくついて決定的な刺激が物足りないというのに徐々に下着を濡らしていく。

目が頭が欲に負けてとろりと溶けて男に忠実になれと急かしてくる。

頭の声を拒否すれば現実にも反映されて仕置きと言わんばかりに愛撫が明確になって、蜜芽を押し潰して擦り上げ、我慢ならない嬌声を上げざるをえず、蜜口の外ですぐにでも入ろうと待機している指にさえ蜜を纏わせるかのように愛液が溢れていく。
「ダメぇ、今はだめなのぉ……！」
「なにがダメなんだ？」
「いたいの、いやだぁ」
「いやだと言うのに、こんなに濡らしてお前は賢い子だ。痛くならないように柔らかくしてやろうな」
　エメトセルクのしっかりした筋肉が付いたしなやかな腕が丸めている背中に回って一気に抱き上げるとそのまま膝の上に乗せ向かい合わせになると彼が脚を外側に開いていくと自然と脚が大きく開いて、シミを作るほど蜜が滲んで使い物にならなくなっている下着をずらし、濡れそぼっているそこへ指が潜っていく。
ゆっくりと検分するように弄られて、自分の意思とは関係なく広げられていく。
「ほら、指が入っているぞ。分かるか？ぬかるんで温かく私を迎えている」
「ん、あふっ、はずかしい」
「もっと恥ずかしいことをしたことがあるだろ。ほら、もう一本じゃ足りないとせがんでいるじゃないか」
　二本目の指が突き立てられてざらりとした内側を撫でられると反射的に締め付けて体の中に入っていると嫌でも伝えられる。バラバラに動かされるたびにくちゅ、ぐちゃりと耳にいやらしく聞こえる水音が絶え間なく鳴っている。
　中がもう熱くて仕方なくて、欲しいと切なくなってくる。
「あっ、あんっ、エメトッ、ぁぁ……！」
「これ以上恥ずかしいことは嫌みたいだ。味見だしな。ここまでにしよう」
「あっ、や、やだ！」
　腰を浮かされて引き抜かれた指の圧が消えた。彼の指を見ると照明でぬらりと光って、ゴクリと唾を飲んだ。下腹部が物足りないと訴えているのが自分の頭の中で言葉として吐き出されてしまっていて、願望が渦巻く。
「どうして欲しい？」
　強く抱きしめられ答えがわかっている彼の耳元で囁く声は嗤っている。
ご丁寧に未だ服を着ている彼の脚の間に座らされていているのは硬く盛り上がって意識をせざるを得ないそれが欲しくてしょうがなくさせる為だ。硬いそれが布越しに押しつけられる。
「あ、う」
「お前が欲しがらなければ私は手が出せないんだ。受け入れろよ。楽になる」
「私、は、エメトセルクが、好きッ！」
　快楽で薄目でしか見えないが、彼は目を見開いている。
「だから、恥ずかしいところいっぱいみられても、だいじょうぶ、だ

よ」
　途端、彼はとても大きなため息をついて天井に顔を向けて、口元を手で覆っている。耳が真っ赤だ。
「……お前、それは、分かり合えたとはいえ、あぁ、お前な……！」
　珍しく彼も動揺しているようだとても気分がいいな、とへらっと笑っていると急に潰れそうになるほど強く抱きしめられ息が少し苦しくなる。
「私もお前が好きだ」
（あ、ダメだかわいい）
　なにをされてもいい。
「好きにしていいよ」
「良い子だ……腰を上げるんだ」
　エメトセルクに寄りかかるようにして腰を上げると、下着を膝まで引き摺り下ろされ、透明な糸を引いていて、彼はその様子を見ながら下履きを緩めて、飛び出すように現れた天を向いて大きく長いそれが蜜口に擦り付けられる。
「お前が欲しがっていた物だ。目を逸らさず見ていろ」
「ぁっ……」
　見せつけて、雄が力強く潜り込んで、媚肉を掻き分けてくる。
「腰を下ろせ」
「はっ、うっ、む、りぃ」
　先端が進んで飲み込んでしまえば、あとは意志に関係なくずるりと入り込む。媚肉が硬い肉の棒と擦れ合うだけの行為がとても愛おしく、腹と頭の奥が痺れて心地よく声が思わず吐息と共に溢れる。
「ふふっ、腰が降りて来てるぞ」
「あっ、あっ……入ってる、はぁ、うっ」
「ああ、今、締め付けたな。お前のここは欲深くて私を離したくないらしい」
　そりゃあ、強請って貪らせるまでに躾けられてきたのだ。
なにも知らなかった私に手取り足取り腰取りと痛みのそれが気持ちいい事なんだと教えたのも、恥ずかしいけれど彼の前なら何を見せても良いと思わせるように愛してしまったとも過言じゃない。寧ろ、彼に染められていると優越感さえある。
　始まりの男はこの人で、多分、最後の人もこの男なのだ。
　根元まで入った欲の塊は無遠慮に蜜壺の中にある媚肉を掻き寄せて貪るように幾度も引き抜かれては独占する為に埋め込まれるを繰り返される。
「ん、んっ、んんッ！」
「さっきみたいに、声を出せ。お前の声が聞きたい」
「あっ！あぁっ、んぁ、やっ、ふか、いッ！あぁん！」
「あぁ、
　深く突き立てられて引き抜かれずに腰の奥を捏ねるようにして小刻みに突かれれば胎にある物を締め付けて凶悪な形がよくわかってしまう。
「あ、だめ、いっちゃう、いっちゃ、かはっ、ぅっ、うぅ」
「存分に登り詰めろ、ッ、出すぞ」

一際、強く貫かれて体全体が強張って全体重を彼に預けると生ぬるい熱が胎の奥に感じる。それに言い知れない満足感を得て、彼の肩を借りて腰を上げようとしたが、ぐっ、と腰を押し付けられ不意に高い声を上げた。
「な、なんで」
「ベッドにご招待だ。なに、すぐ隣なんだしっかり抱きついていろ」
「あ、あ、まっ」
言い終わる前に立ち上がられ反射的に脚を腰に絡ませて胸の間に隙間がないほど抱き締めるが、甘い一撃で声が震える。
一度、種を蒔かれた胎の奥がきゅっとよく濡れたそこを締め付けて、たった数歩の距離だというのに、蜜が溢れて床にポタリと一滴溢れた。ベッドに仰向けで横にされる頃には息も絶え絶えになり、安心した矢先に一突きされてまた絶頂してしまった。
「いじわる……！」
「もう少し付き合え。今とても興奮していてもう一度お前を抱かなければ治らない……いいだろう？」
拒否を黙らせるように口付けられて喘がされっぱなしの口の中に舌が入り込む。肉厚で長い舌は唾液を絡めて喉の奥に送り込まれる。
「……苦い」
「慣れさせてやるから好きになれ」
「うん」
「お前はかわいいな」
脚を折り畳まれて上から打つように腰を穿たれる。逃げ場のない快楽にベッドのシーツを掴めば手を解かれて大きな手が指股に手を噛ませてベッドに押しつけられる。
全てを彼に縋り付いて甲高く甘い嬌声を上げて果てれば、彼が二度目の吐精を果たして、やっと引き抜かれた。
何度も深く息をする私とは対照的に彼は深く息をついたゴロリと隣に横になった。
「さっき、好きと言ったな」
「うん」
先ほどまで繋がれていた手が今度は頭を梳かすように撫でてくる。心地よくて先ほどまでの疲れが軽くなった気がする。
「私は安心して眠りにつこうとしたところにお前が冥界へ片足を踏み入れてきて、おちおち眠っていられなくなってしまった」
「そんなに心配する、こと？」
「ただでさえ重要な手がかりを星に還るまで私は忘れていたんだぞ。そして、お前に星の未来を託したと思ったら冥界へ迷い込もうとしてくるんだ。格好がつかん」
「寝てればよかったのに」
「そうしたかったが、隣にお節介な友人がいたからな起きざるをえなかった。だから、こうしてあり得ざる続きを生きている」
「私に付き合ってくれて、ありがとうエメトセルク」
「エメトセルクとしての今世最後の受肉だ。折角なら切望した魂と共にありたい」
「魂だけ？」

「お前は私を失望させなかった。期待通りに今を謳歌している……愛しくないわけがない。昔と今の私を知ってもなお、好きなんだろう？これ以上の幸福はないさ」
　こつん、と額同士がくっついてうっとりとずっと眺めていたくなる輝ける瞳が熱を宿して見つめている。
「名を呼んでくれるか」
「呼んでいいの？」
「お前しか知らない名だ。そうだな、改めて告白をしよう」
　頬に手が当てられて、私も彼の頬に手を添えて指先で肌を撫でる。分かり合い、星を救うと信じてくれた永き時を生きた愛しい人。せめて、最後までずっと隣にいたい人。
「好きだよ。ハーデス」
「あぁ、私も愛しているよ。我が命数よ」
　一つ唇同士をくっつけて、お互いを抱きしめ合いながら、心地よい微睡に身を任せた。